

学習内容報告書 フォーマット

学校名	和歌山市立雑賀小学校
授業者	赤松 広志

1. 単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1. 単元名

森～川～海をつなぐ紀の川の旅

1-2. 学年

4年生

1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

社会科 総合的な学習の時間

1-4. 単元の概要

和歌山県を横断する紀の川の上流である奈良県川上村から、ペットボトルの水が届くところから学習がスタートする。おいしい水や木が描かれたペットボトルのラベルに関心をもった子供達は、紀の川の上流にある川上村について調査を始める。水を送ってくれた川上村の「森と水の源流館」館長の尾上氏との交流を通し、森と水の関係について知った子供達は、実際に川上村で森や川を見学したり、上流の水に触れたりして、目の前の水が川を通して自分達の生活にまでつながっていると「水のつながり」を実感していく。さらに中流や下流の見学を通して、水質や生き物の変化、またそこで水と共に生活を営む方の努力や願いに気付いていく。このような森や川、生き物と出会った上で、子供達は、海洋ごみ問題について知る。実際に近くの海に調査に行き、ごみを拾い集めたり、海洋ごみ問題に関わる人達の取り組みを聞いたりする中で、海洋ごみ問題が解決可能かどうかを考えていく。本単元は、このように水のめぐみと水に関わる問題と出会った子供達は、森～川～海のためにどのような行動が必要かを考え、実践していくことで、子供達が環境保全への意識を高めていくものである。

1-5. 単元設定の理由・ねらい

紀の川は、奈良県大台ヶ原を水源とする、和歌山県を横断する河川である。奈良県に入ると「吉野川」と呼ばれ、流域では、昔から林業・農業・漁業と第一次産業が盛んに行われている。この吉野川・紀の川を学習することで、子供達は、山から川、川から海、海から雲となり雨が山へといった「水の循環」を知り、さらにその水の恵みとして第一次産業が営まれることを学ぶことができる。

本単元では、子供達は紀の川の下流域に位置する本校のある和歌山市雑賀地区と上流域に位置する川上村が紀の川を通じ、水でつながっていることを学習する。子供達は、川上村に住む方達と交流したり、川上村が水源地にある村として、きれいな水を下流に送るなどの宣言を掲げていることを知ったりすることを通し、身近に流れる川の水が自分達だけのものではなく、つながりの中にあるものととらえることができることを考える。このことが、高学年において、地域の海の魅力を見つけ、海の問題を社会全体の切実な問題として考える素地になると考え、本単元を計画した。

1-6. 育みたい資質や能力、態度

- ・市や県では、安全で安定的に飲料水を供給できるように進められていることや、水が上流～中流～下流にかけて、さらには森～川～海へとつながりのある資源であることが分かる。また、実地調査や施設の見学等を通して、水がつながりあるものであることを、実感を伴って理解したり、森・川・海と関わって生活を営む人々からの聞き取りから、人々の努力により水環境が整えられていることを知ったりして、環境保全への意識を育む。(知識及び技能)
- ・体験活動や聞き取り調査等で情報を集め、「水」「生き物」「ごみ」に着目して、上流・中流・下流を比較し、水質と生物との関わりや、人の生活が水環境に及ぼす影響などについて考え、表現する。(思考力・判断力・表現力等)
- ・森～川～海の水のつながりや、それによってもたらされる水のめぐみについて知り、世界規模の課題である海洋ごみ問題について考えることを通して、課題解決のために自分がどのような行動ができるか考え、友達や地域の人と協働しようとする態度を育む。(学びに向かう力・人間性等)

1-7. 単元の展開 (全70時間)

時数	学習活動・主な内容	・教師の指導 【主な評価】 ○外部連携 ●使用教材等
1 ～ 10	<p>森と水の関係について調べよう</p>  <p>「水のペットボトルなのに木が描かれているのはなぜだろう？」について調べていった。水のつながりを表現した歌である「水の旅のはなし」の歌詞を読み取ったり、オンラインで水を送ってくれた方の話を聞いたりして、水の始まりへの関心を高めていった。</p>	<p>・紀の川が和歌山県を横断する川であり、奈良県に入ると吉野川と呼称が変わることを地図帳やタブレット PC を使用させて指導する。【作文】</p> <p>○森と水の源流館 ●飲料水「かわかみの水」 ●歌「水の旅のはなし」</p>
11 ～ 20	<p>紀の川の旅～上流へん～ 川上村に行こう</p> <p>奈良県川上村に行き、森や川を見学したり、実際に水に触れる体験をしたりした。森と水の源流館では、水の始まりや水のつながりについて講話を受け、これまでの学習内容を確認、中流や下流、海に関心をもった。</p> 	<p>・川上村の見学から、「水」「生き物」に焦点を当て、今後の学習を進められるようにする。【発言・作文】</p> <p>○森と水の源流館</p>

<p>21 ～ 24</p>	<p>紀の川の旅～下流へん～ 紀の川下流に行こう</p> <p>自分達の住む和歌山市に流れる紀の川を見学に行った。紀の川の下流には、干潟が広がっており、干潟に住む生き物を捕まえて生物多様性について話を聞いたり、上流の水を比較して、水の汚れに気付いたりした。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・見学後には、上流と下流の「水」「生き物」について比較しながら、気付きを交流し、「上流より下流の方が、水がよごれている。」「上流より下流の方が、生き物が多い。」ことへの疑問をもたせる。【作文】 <p>○和歌山県環境学習アドバイザー</p>
<p>25 ～ 26</p>	<p>水と生き物の関係について知ろう</p> <p>海洋ごみの調査や問題についての発信を行っている「うみわかまもるプロジェクト」の取り組みを行う平井氏に「水の先生」として出前授業を行ってもらい、水と生き物について知る。人の生活が水をよごしていることやよごれの中にある有機物により、下流や海に向かう程、生き物が多くなることを知る。また下流に多く見られたごみによって、海では多くの生き物が犠牲になっていることを聞き、「海洋ごみ問題」について関心をもった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の疑問から、平井氏との出会いにつなげ、水と生き物の関係について理解させる。またごみが生き物に影響を与えていることから、「水」「生き物」に加え「ごみ」にも焦点を当てて、中流、海への見学につなげられるようにする。【作文・発言】 <p>○NPO 法人わかやま環境ネットワーク</p>
<p>27 ～ 40</p>	<p>紀の川の旅～中流へん～</p> <p>紀の川の中流域である紀の川市への見学に行った。紀の川市にある紀ノ川漁業協同組合では、鮎の養殖・放流の様子を見学する。また紀の川市では果樹栽培がさかんであり、社会科「県内の特色ある地域」と関連させ、フルーツ栽培がさかんに行われているのは、紀の川がもたらす豊かな土壌のおかげであることを知った。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・紀ノ川漁業協同組合では、資源保護を目的に鮎の養殖・放流を行っており、水環境と共に生きる人達の努力や願いについて考えさせる。【作文・行動観察】 ・紀の川市のフルーツ栽培に関わる人達と出会い、収穫体験や食べる体験を通して、紀の川の水が豊かなめぐみをもたらすことについて理解を深める。【作文】 <p>○紀ノ川漁業協同組合 ○紀の川市役所</p>

紀の川の旅～海へん～

子供達は、これまでも様々な行事で、海で活動する経験をしてきている。ここでは、「水」「ごみ」に焦点を当てて活動を行った。特に「海洋ごみ問題」について知った子供達は、「ごみがどれだけあるか?」「どのようなごみがあるか?」を疑問に思っていたため、ビーチクリーンをしてごみを集め、後日ごみの分類を行った。多くのごみに出会った子供達は、「この問題は解決できるのだろうか?」と考え、その答えについて自分の考えをもつために、海につながる川や川が流れる町の清掃活動をしたいと話し合い、活動を行った。さらに紀の川上流のごみの様子について尾上氏にオンラインで聞き取りを行ったり、海ごみアートで問題について発信している和歌山大学の学生に話を聞いたりした。



・海洋ごみ問題という世界規模の問題について、これまでの体験や人との出会いから、解決可能かどうかについて考えさせ、問題解決のためには1人1人の主体的な態度や行動が大切であることを気付かせる。【作文・発言】

○森と水の源流館

○和歌山大学

41
～
60

海洋サミットでこれまでの学びを伝えよう

和歌山市内の数校が集まり、海洋問題について自分達の学びを発表したり、問題について議論したりするイベントである「海洋サミット」に参加した。子供達は、これまでの学習を振り返り、他校の子やその保護者に伝えたいことを考えた。当日はこれまでの学びや考えてきたことを歌やプレゼンを使用して発表することができた。



これまでの活動から、海洋ごみという水に関わる問題だけでなく、水のつながりや水のめぐみについても伝えることで問題解決の必要性について深く考えてもらう発表にできるようにする。【発言・作文】

○NPO 法人わかやま環境ネットワーク

61
～
70

2. 学習活動の実際

実施した単元中のキーとなるような時間（導入の時間・主となる活動の時間・まとめの時間など）の学習内容をご記入ください。また、複数の時間についてご記入いただける場合には、この項目をコピーして複数記入していただいて構いません。

2-1. 単元における位置づけ

単元 時間中の 時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目 / 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

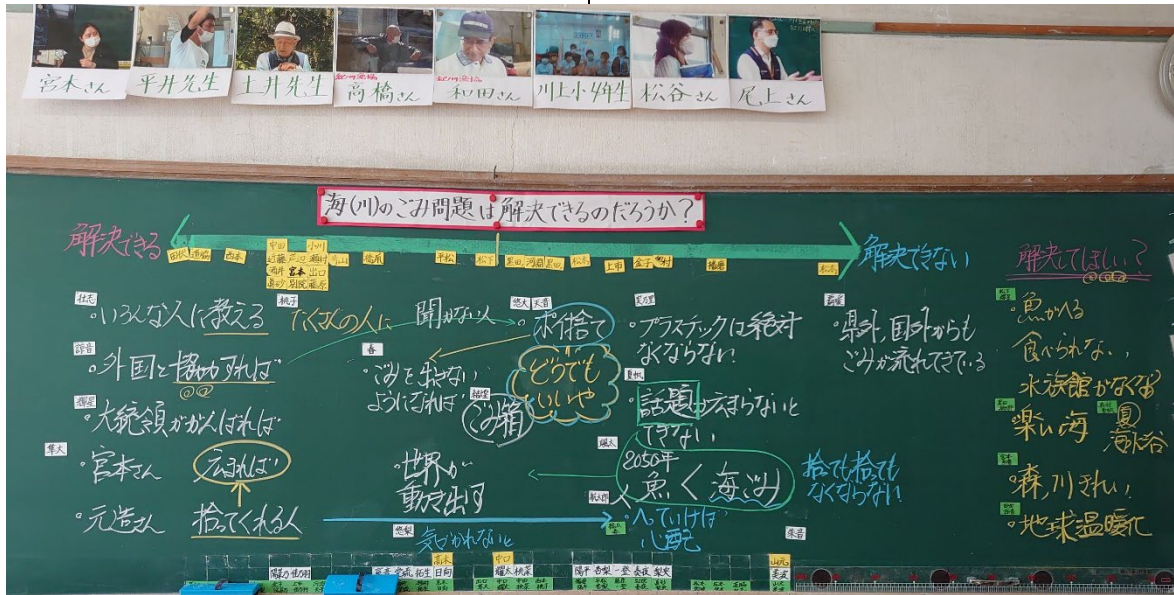
2-2. 本時の目標

「海や川のごみ問題は、解決できるのだろうか？」について話し合うことを通して、問題解決に向けて努力している人の存在や、海洋ごみ問題について無関心でいる人に着目し、問題についての発信や多くの人の協力の必要性に気付くことができる。

2-3. 本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
<p>○本時の課題を確かめる。</p> <p><input type="text" value="海や川のごみ問題は解決できるのだろうか？"/></p> <p>○課題について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none">・いろいろな人にこの問題を教えることで解決に向かうんじゃないかな？・宮本さん（和歌山大学）のように海ごみアートで問題を発信すれば、ごみを拾ってくれる人が広がっていくと思う。・プラスチックは自然にはなくなると言っていたし、2050年には海の魚より海のプラスチックの方が多くなると言っていたから解決はできないと思う。・和歌山だけではなく、県外や国外からもごみが流れてきているから、解決は難しいと思う。・でも森や川、海は楽しいところだから、解決してほしい。 <p><input type="text" value="一番の問題は何だろう？"/></p> <ul style="list-style-type: none">・ポイ捨てをする人がいること。・ごみのことをどうでもいいやっているといる人がいること。・みんなが協力すれば解決できると思う。	<ul style="list-style-type: none">・課題を確認する前に、これまでの活動を振り返り、水のつながりや水のめぐみを踏まえた上で、課題について話し合うことができるようにする。・海洋ごみ問題について、簡単には解決できないことを把握した上で解決方法について考えをもてているか。（発言）・海洋ごみ問題について、自分事として考え、解決が難しくともどうにかしたいと切実感をもっているか。（発言）・海洋ごみ問題について無関心でいることが問題が解決に向かわない要因であることに気づき、自分自身について振り返っている。（作文）

【本時の板書】



3. 今回の活動の自己評価

今回の活動では、和歌山県を横断する紀の川を上流・中流・下流と見学に行く中で、それぞれの場所で体験を楽しみながら、水の様子の変化や、生き物やごみの様子について調査を進めた。子供達は、紀の川の様々な場所に行くことを楽しみに学習を進め、それぞれの場所で、水の美しさや多くの生き物、捨てられたごみ等、水のめぐみや問題に出会っていった。このことが学習を自分事とし、子供達が主体的に話し合ったり、調べたりするきっかけとなった。

また子供達は、体験を通して「水」「生き物」「ごみ」等、個々に関心を高め、「水」に注目して川を見る、「生き物」に注目して川を見る、「ごみ」に注目して川を見るといったように、学習を個性化させていった。ある子は、鮎について詳しく調べ、鮎が川や海を行き来する中で成長することを自分達の活動と照らし合わせていた。またある子は、ごみが川に流れて海へといってしまうことから、地域の清掃活動を始め、ポイ捨て禁止のポスターを作成して、地域の方へ呼びかけを行っていた。このように自分の関心をもとに学習を進めてきた子供達が、「海洋ごみ問題は解決できるのだろうか?」という課題についてクラス全員で考え合ったときに、様々な観点から意見を出し合うことができ、海洋ごみの問題の大きさを理解していくことができた。

以上のように体験をもとに学習を展開できたこと、子供個々の関心で学習を進められたことで、海洋ごみの問題の深い理解につながったことが、本実践の成果である。

4. 今後の課題

紀の川は、全長135kmとされており、奈良県から和歌山県にまたがっている河川である。そのため、限られた授業時間の中では、そのすべてを見て行くことはできないため、「上流」「中流」「下流」そして「海」と各所に焦点を当てることで学習を進めてきた。しかし、そのことで全70時間の中で学習活動に区切りが生まれ、1つ1つの学習活動の接続部分で、教師主導で進めることが多かったように思う。

- かわかみの水から色々な話につながって、1年間を通していろいろ考えていくことが楽しかったです。
- 最初は「水から勉強できるのか?」と思っていたけど、水の始まりは森とかどンドン他のものにつながっていったとおもしろいなと思った。

上記のような感想をもった子は、学習を一連の流れで捉え、考えを膨らますことができたと考えられるが、

「一年を通してごみを捨てたらだめと思った。」のように、現在の学習内容にしか考えをもてずにいる子については、この学習が子供主体ではなく、教師主導のものになってしまったのではないかと感じている。今後は、どこまで子供が主体となって学習を進めていくか、そのためにどのような支援や事前の活動計画が必要なかを考えていかなければいけない。

5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点

※実施した單元ごとに作成してください。

※写真、画像、図表等の使用可。必要に応じて記入欄やページ数を増やしても構いません。

※基本レイアウト

フォント：MS 明朝、10.5 ポイント / マージン：上下端 20mm、左右端 16mm

※ファイル名は「学習内容報告書_学校名」とし、複数提出する場合は学校名の後に数字を記載してください。

例：学習内容報告書_海洋市立パイオニア小学校 1

※年間指導計画（年間の指導計画における単元の位置づけが分かる資料）があれば別添資料として提出してください。フォーマットの指定はありません。